『ジャン・クリストフ』第9巻「燃える茨」
— 音楽資料 —

2023年11月25日（土）午後2時−4時

作曲家リヒャルト・シュトラウスとロマン・ロランが親友だったという事実は、案外と一般に知られていない。しかしシュトラウスとの交流は、小説家としてのロランの創作活動に多大の影響を与えた。
ロランをひきつけたのは、シュトラウスの音楽が持つゲルマン的な「力」の魅力だったのだろう。
この「力」と「意志」こそは、フォーレやドビュッシーやラヴェルといった同時代のフランス音楽に——それらがどれだけ洗練されたものであるにせよ——最も欠けていたものである。シュトラウスはロランに対して次のように言ったことがある。「シュトラウスは皮肉をこめて言う‥〈あなた方フランス人は悪趣味な何かを言うことをいつも恐れている。〉そして彼はこの精神的拘束をドビュッシーの作品の中に見ている、または見たつもりでいる。彼は言う‥〈とても上品で、とても‥‥とても人工的です、自然発生的なものが全くありません。飛躍というものが欠如しています。〉」恐らくこれはロラン自身の見解でもあったことだろう。
しかしロランは、シュトラウスに対してついぞ、ベートーヴェンに対するような無条件の共感を示すことはなかった。即ち彼は、シュトラウスの音楽における「力」が、しばしば暴力的なものへと傾くことに強い危惧を抱いたのである。第一次大戦後、ロランは同時代の音楽について発言することを止めてしまった。そしてひたすら彼は過去の古典の研究に、即ちベートーヴェン研究に没頭することになる。

（岡田暁男）

① ツァラトゥストラはかく語りき
1896年11月27日、フランクフルトで、作曲者指揮の第4回ムゼウム協会コンサートにて初演。
フリードリヒ・ニーチェの同名の著作にインスピレーションを得て作曲された

② ドビュッシー：ペリアルとメリザンド